

投稿

伊達英太郎氏天文資料

星に魅せられた人々(1)

～伊達英太郎の天文資料～

吉田 陽一（アマチュア天文史家）

1. はじめに

2017年、私は伊達英太郎（1912～1953、図1）が遺した天文資料（以下伊達天文資料）を入手しました。伊達の資料は長期間放置され、そのまま廃棄されるところでした。入手後その資料を詳しく調べてみると、そこには戦争の時代を生き抜いた、星に魅せられた天文家たちの生き生きとした姿が残されていました。（文中敬称略）



図1 観測中の伊達[1]

2. 伊達英太郎



図2 10代の伊達 大阪南炭屋町（現西心斎橋）の自宅屋上の観測所にて[1]

伊達は大阪出身のアマチュア天文家です。実家は大阪心斎橋の老舗「てんぐ履物舗」でした。伊達のアマチュア天文家としての活動分野はとても広く多彩でした。健康上の理由で、20歳の頃から大阪郊外の雲雀ヶ丘で転地療養を始めましたが、転地療養先の別邸にも観象台（図3）を設け、体調が良い時は天体観測を続けました。



図3 大阪郊外の別邸に設けられた雲雀ヶ丘観象台[1]

3. 少年天文研究会

伊達は10代の頃から少年天文研究会（後に天文研究会と改称）を組織し、「科学少年」（図4）「銀河」（図5）「THE MILKY WAY」（図6）などの会誌を発行しました。また、天文同好会大阪南支部長としても活躍し、後進の指導に尽力しました。図7は伊達の自宅で行われた天文研究会新年茶話会の様子です。



図4 科学少年[1]



図5 銀河[1]



図6 THE MILKY WAY[1]

図7 天文研究会新年茶話会
(於：伊達邸、1940年1月13日)[1]

伊達が主催した天文研究会には、佐伯（旧姓渡辺）恒夫・本田実・内藤一男・福井實信らが名を連ねました。村山定男（元国立科学博物館理工学研究部長）は、伊達のことを最大の師と讃えています[2]。

4. 東亜天文協会遊星面課長

伊達は、東亜天文協会（現東亜天文学会）遊星面課長としての重責を担いました。図8は山本一清会長からの遊星面課長任命ハガキです。伊達は、戦前の火星観測四天王（伊達・木辺成麿・前田治久・佐伯恒夫）でした。当時のアマチュア天文家としては最大級の26 cm 反射赤道儀（木辺鏡）（図9）を所有していました。また、無メッキ11.5 cm 反射赤道儀（木辺鏡）（図10）による太陽黒点写真撮影やプロミネンス（図11）の連続観測も行いました。

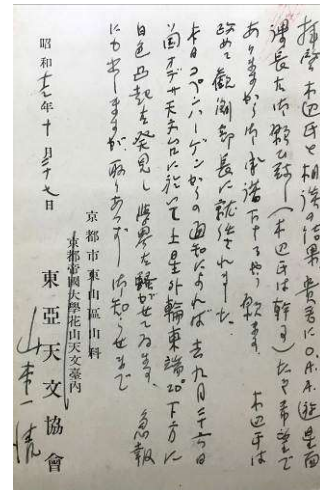
図8 山本一清からの遊星面課長任命ハガキ
(1938年10月27日)[1]図9 当時アマチュアとしては最大級だった
26 cm 反射赤道儀[1]



図 10 11.5 cm 無メッキ反射赤道儀[1]

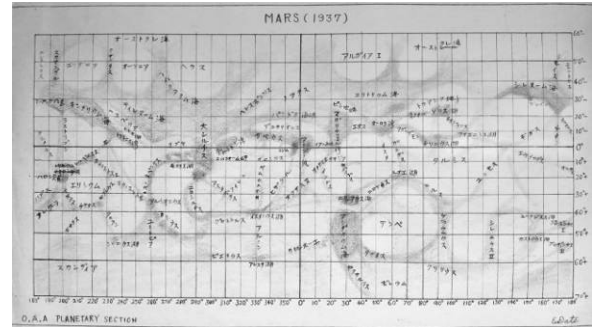


図 13 1937 年の火星図[1]

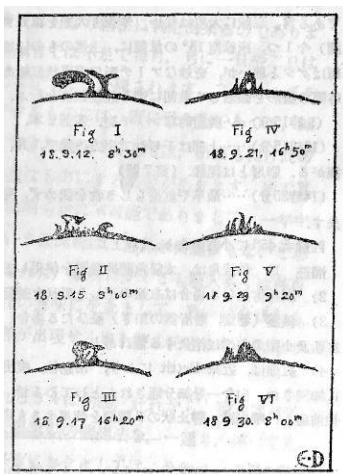


図 11 伊達のプロミネンススケッチ[3]

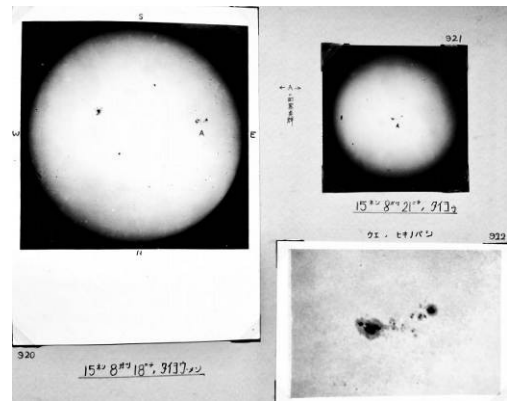


図 14 1940 年の太陽黒点写真[1]

5. 惑星スケッチ・太陽黒点写真

図 12 は伊達の 1935 年の惑星スケッチ、図 13 は 1937 年の火星図、図 14 は 1940 年の太陽黒点写真です。

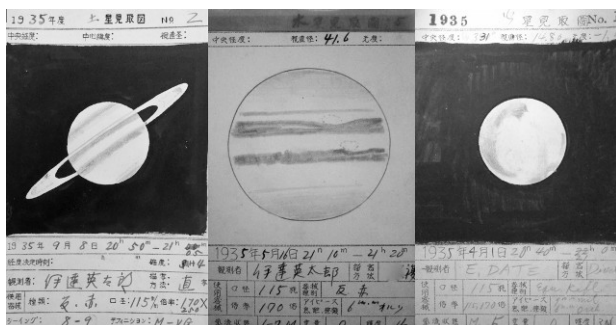


図 12 1935 年の惑星スケッチ[1]

6. 1933～1941 年の月・惑星スケッチ

伊達の資料は膨大です。東亜天文協会遊星面課に全国から寄せられた、1933～1941 年の月や惑星スケッチが多数保存されています。若き日の佐伯恒夫の火星スケッチ (図 15) も多数あります。

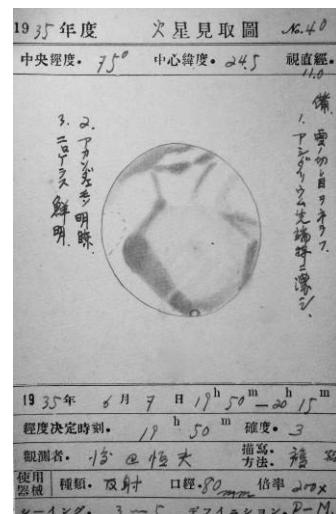


図 15 佐伯 (旧姓渡辺) 恒夫の火星スケッチ (1935 年 6 月 7 日) [1]

7. ガラス乾板写真

伊達が 7.6 cm 無メッキ反射望遠鏡で撮影した太陽のガラス乾板写真や、木辺成麿が撮影した月や惑星のガラス乾板写真が多数あります。1938～1948 年に撮影されたものです。

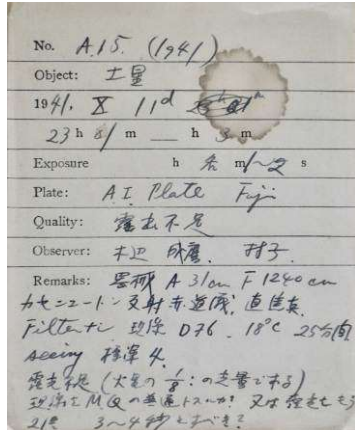


図 16 木辺成麿・村子夫妻が撮影した土星のガラス乾板の保存袋(1941 年 10 月 11 日) [1]



図 17 木辺成麿・村子夫妻が撮影した土星(1941 年 10 月 11 日撮影) [1]

8. 天文写真帖

伊達天文資料の中で特に重要なのが天文写真帖です。1932～1937 年に撮影された、約 800 枚の天文関係の写真が収められています。全国のアマチュア天文家の所有機材の写真も多数あります。図 18 は、草場星図を制作した草場修です。草場は、大阪の衛生組合での溝浚いの仕事が終わると毎日中之島の図書館に通い、5 年半かけて約 32000 個の星を含む星図を完成させました。時の人となった草場は

山本一清に見いだされ、京都帝大花山天文台に職を得ました[4]。



図 18 京都帝大花山天文台職員時代の草場修(中央) [1]

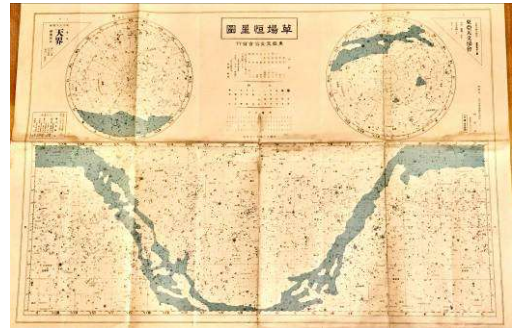


図 19 草場恒星図[5]

9. 天文家との繋がり



図 20 前列左端山本一清、前列中央小山秋雄、前列右端木辺成麿
(変光星会議 於：京都楽友会館) [1]

伊達の天文家との繋がりとは、関西のみならず全国に広がっていました。荒木健児・射場保昭・岡林滋樹・木辺成麿・坂上務・佐伯(旧姓渡辺)恒夫・柴田淑次・清水真一・瀧田正俊・富田弘一郎・中村要・中野繁・野尻抱影・本田実・前田治久・山本一清など、プロアマ

問わず多彩でした。

10. 倉敷天文台



図 21 倉敷天文台創設メンバー、左から宮原節、水野千里、山本一清、中村要、原澄治、小川龍五郎、中藤益之介
(1929 年 11 月 23 日撮影) [1]



図 22 カルバー 32 cm 反射赤道儀と岡林滋樹 [1]



図 23 カルバー 32 cm 反射赤道儀と荒木健児 (1932 年 8 月 15 日撮影) [1]

伊達天文資料には創設間もない頃の倉敷天文台の貴重な写真が多数残されています。

倉敷天文台は、民間初の天文台として、1926 年 11 月 21 日に創設されました[6]。図 21 は、創設 3 年目に撮影された創設時のメンバーです。図 22 は、いて座新星や、オカバヤシ・ホンダ彗星を発見した岡林滋樹です[7]。

11. 射場 (いば) 天体観測所

射場天体観測所は、実業家の射場保昭 (1894-1957, 図 24) が 1928 年神戸・須磨に設立した私設天文台です。当時の東京天文台や京都大学天文台に勝るとも劣らない観測機器 (図 25, 26) や資料が備えられていました[8]。



図 24 射場保昭 [8]



図 25 18 cm 屈折赤道儀 (中村要レンズ) と射場天体観測所 [1]

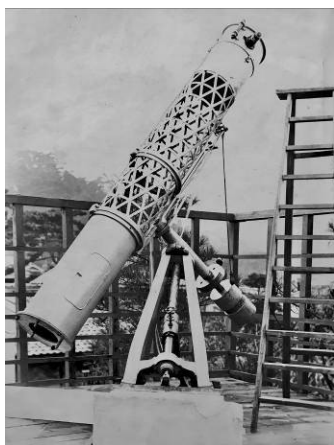


図 26 リンスコット 30 cm 反射赤道儀[1]

12. 知新（ちしん）観象台

知新観象台は、清水真一(1889-1986, 図 27)が静岡県島田市の自宅（知新薬局）に設立した私設天文台です。

1920 年代が日本のアマチュア天文家による天体写真の幕開けといわれています[9]。清水は当時天体写真の第一人者といわれていました。伊達も天体写真を撮影していたので、清水とは強い繋がりがありました。清水が撮影した天体写真（図 28, 29）は、今見ても素晴らしい出来栄です。また、清水の特筆すべき業績としては、1937 年のダニエル周期彗星の再発見が挙げられます[10]。清水の天体写真はポストカードとなっていたため、ほとんどの写真に通信文が添えられていました。

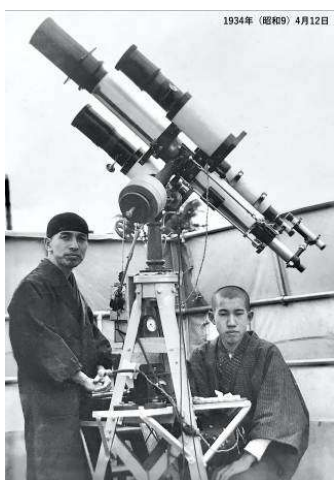


図 27 清水真一（左）と長男の慧一[1]



図 28 M42 と馬頭星雲・燃える木[1]



図 29 M31（1933 年 10 月 26 日撮影, 露出 70 分）[1]

13. 天文蒐集帖

天文蒐集帖（図 30）は 5 冊あります。1932～1943 年の天文関係の新聞記事や、天文仲間からの手紙やハガキが多数残されています。木辺成麿が京都大学花山天文台員として参加した、1936 年北海道皆既日食の報告ハガキ（図 31）や、観測成功の電報（図 32）を見た時は感激しました。図 33 は、野尻抱影からのミルキーウェイ送付に対する礼状です。



図 30 天文蒐集帖[1]



図 31 1936 年北海道皆既日食に向かう途中
駅から伊達に出された木辺のハガキ[1]



図 32 木辺成麿の日食成功電報[1]

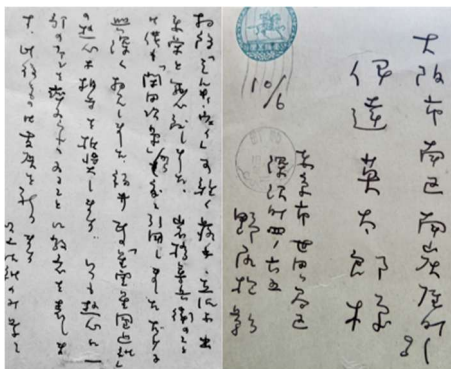


図 33 野尻抱影の感謝のハガキ[1]

14. おわりに

「星に魅せられた人々を思い起こして息吹を与え、その熱意や思いを今に甦らせる。それが今を生きる者の力や指針になるように。」

これは、私が公開しているブログ[11]を見た友人が贈ってくれた言葉です。

伊達天文資料は、大阪の郊外で保管されていたために、空襲に遭わずに後世に残されました。天文同好会設立(1920年)と時を同じくして天体観測に興味をもったアマチュア天文家たちの姿を、伊達天文資料から今後も伝えていきたいと思います。

謝 辞

投稿の機会を与えていただいた、「天文教育」編集担当の皆様には感謝いたします。私が取り組んでいる仕事について、指針になる言葉を贈ってくれた大学時代からの友人、山埜信氏に感謝します。そして戦禍の中、資料を保存された伊達英太郎氏に心より敬意を表します。

文 献

- [1] 伊達英太郎氏天文資料
- [2] 阿部昭(1986)『季刊星の手帖 '86』VOL.33, 星の手帖社:44-47
- [3] 伊達英太郎(1943),「私の紅焰観測」,東亜天文学会, 天界, 23(269):358-361
- [4] 天文古玩「貧窮スターゲイザー草場修」
<http://mononoke.asablo.jp/blog/2012/04/09/6405885> (2024/12/27 アクセス)
- [5] 草場修(1937)『草場恒星図』, 東亜天文協会
- [6] 日本アマチュア天文史編纂会(1987)『日本アマチュア天文史』, 恒星社厚生閣:12-13
- [7] 同掲書『日本アマチュア天文史』:136
- [8] 竹本修三(2013)「屈折・反射望遠鏡に関するエンスリー対ウォーターズの論争に加わった射場保昭」, 日本天文学会, 天文月報, 106(10):675-683

-
- [9] 同掲書『日本アマチュア天文史』:265
[10] 同掲書『日本アマチュア天文史』:275
[11] 中村鏡とクック望遠鏡
<https://double-cluster2018.amebaownd.com>
(2025/05/08 アクセス)



吉田 陽一